

新刊紹介

近代古説話文學論

野村 八良氏著

本書は著者の學位請求論文であると聞く。著者については已に大正十一年に出版されたところの本書の先驅とも云ふべき鎌倉時代文學新論を初め、大正十五年に刊行せられた國文學研究史其他によつて其の高名を知ること久しい。私は彼の鎌倉時代文學新論、更に増補して昭和五年に上梓されたその増補本によつて此の方面の研究に關して幾多の恩恵を受けて來た。是等の書は學界に向つて只、從來比較的閑却されてゐた此の方面の研究の先驅、啓蒙の仕事を果たしたものと考へられるのみでなく、其の書史學的な基礎的研究は著者の最も得意とされる點でもあらうが、全く後學のために一大礎石を据ゑられたものと言ふも過言ではあるまい。この事は同様に『近代古説話文學論』に移しても亦言ひ得られると思ふ。

倍、本書『近代古説話文學論』は之を概説すれば①その本論は増補鎌倉時代文學新論の第四章及び第五章の説話文學並びに第六章佛教文學の項を基としてこれに取捨選擇を施し、②更に其後

の御研究も附加せられたるのみならず③前著に於ける御研究を更に別箇の立場に於いて分類し、配列し、系統づけられ、④次には等を綜合的に論述されてゐるものであつて、⑤なほ新らしく加ふるに序論として之に先行する古代神話、古傳説乃至は平安朝時代の説話文學等について比較的詳しく記るして説話發展の經路を示されたものであると言つてよいであらう。

即、全篇を序論と本論とに二大別し⑤序論に於いては之を更に(一)國文學發生問題と説話文學、(二)(三)古代神話及び古傳説の一瞥、(四)中古時代説話文學概觀の四項に分けて論じ、その(四)中古時代説話文學概觀に於いては日本靈異記、大和物語三寶繪詞、地藏菩薩靈驗記、打聞集、今昔物語、其他是等の説話文學書に准すべきものとして江談抄、無名抄、袋草紙、今鏡等の作品について夫々別々に述べられてゐる。

次に本論を近代古時代説話文學研究とせられ、先づ③作品を分つて(甲)非組織的なもの(子治拾遺物語、發心集、閑居友、今物語、世繼物語、寶物集、撰集抄、唐物語、沙石集、雜談集、眞言傳、三國傳記)(乙)組織的なもの(蒙求和歌、古事談、續古事談、十訓抄、古今著聞集、私家百因緣集、東齋隨筆)(丙)單一な事柄のみのもの(長谷寺靈驗記、劍卷)の三類としてゐる。これは前者鎌倉時代文學新論に於いて、是等を説話文學及び佛教文學の類に分ちて論述せるものと異なる點である。其の説を見るに概ね増補鎌倉時代文學新論を踏襲し②間々(補)として從來の所説の上に新説を添へられてゐる。其の考證の細部に互

つた點は屢々これを鎌倉時代文學新論に委れてその大綱を記すに止めてゐる。①なほ本書に於いては其の性質上、鎌倉時代文學新論に於いて寶物集、撰集抄等と共に佛教文學として同列に取扱つた法語の類、其他二、三の書はこれを除き、新に世繼物語、東齋隨筆、長谷寺靈驗記、劍卷等の諸書を採つてゐる。④次に以上諸書の内容について綜合的にこれを研究してゐられる。即、(三)發展の因由、(四)說話の種々相、(五)說話傳承の異同、(六)說話の風體、(七)主要說話の色合、(八)表現の技巧、(九)說話に反映してゐる民衆の思想及び生活、(十)餘言の十項に分つて論說されてゐる。

以上の外になほ附録として本書著述に際しての主要參考書を挙げられ、又、本書内容の索引も添へられて研究者の便に供してゐる。所々に挿入された圖版八葉も亦參考となるものである。

かつて我々初學の者は彼の鎌倉時代文學新論によつて幾多の啓示を受けたのであるが、同様の恩恵をまた此の書に享受すること多いこと、思ふ。誠に我々は古代より近古に到る本邦說話文學に關して一大島瞰圖をこゝに得た譯である。

以上、本書に關する拙い紹介は略々了つたのであるが、こゝに少しく本書に對して希望の一端を簡単に述べて擲筆し度い。

先にも述べた如く本書の本論は其の大綱、昭和五年出版の『鎌倉時代文學新論』を踏襲されたものゝ如くである。自序にも本書は數年前の起草にかゝる由見えてゐるから、前著出版の後

日時が少いこと、思はれてさも有り得べき事と考へる。其後の御研究は(補)として加註せられて原稿を濫りに添削されなかつた事を記るされてゐる。自分が希望の一端として述べたことはこれに關してあつて、誠に望外の事かもしれないがこの(補)を更に増加して戴き度かつた事である。

例へば發心集の諸本については八卷本のみを挙げられて、神宮文庫御藏の五卷本を挙げてゐられない。閑居友には寛文板あること、上野帝國圖書館書目で知られてゐる。撰集抄には幾つかの古活字版もあるが、これは十訓抄の項に於ける記載法と同様に、挙げた方がより統一的思想と思ふ。又、慶安四年板がある。これは慶安三年板と異つてゐるから挙げられるべきであらう。

雜誌集には寛永板があり、神宮文庫書目其他に存する。三國傳記には明暦板があり、現に本學圖書館も所藏する。十訓抄の元祿六年板は宮内省圖書寮、靜嘉堂文庫等に藏されてゐる。徒に古板本や古寫本の羅列を望む譯ではないが發心集に於いて五卷本の存否の如きはその基礎的研究の上に少からざる影響を反ばすものであり、更に發心集と密接な關係を有する諸書の研究にも看過すべからざるものである。而してこの五卷本の如き已に昭和八年四月「文學」誌上に永積安明氏が新資料として一般に紹介せられてゐるところである。撰集抄の如きも其の偽作問題をめぐつて未だ何等解決せられる所がない。かゝる狀態に對して出來得る限り其後の御研究を(補)註せられるところがあつたらばと勝手がましい希望の一端を述べた次第である。(昭和十年

九月、明治書院發行、菊版三四四頁、價二、五〇(兩宮)

Sir Charles Elliot
Japanese Buddhism, 1935.

一九二二年に「印度教と佛教」なる大著を出版せられて、既に學者としての高き地位を占めて居られたエリオット氏は、外交官としての經歷を踏まれた人、曾つて駐日大使として日本に來られた事は我々の記憶にまだ新たな所である。本書の初に出てゐるバレット氏の著者に關する長き追想記を見る者は著者が如何に秀拔せる英材であつたかを知るであらう。語學の如きは優に二十餘種を自由に驅使しえたと云ふ。不幸にして病に犯され一九三一年、故國を指して歸航中、遂に斃れて又立たず、三月十六日マラツカ海峡の水底深くその魂は永久の休息を與へられた。眞に傷しいことである。

こゝに舉げた著書はその遺稿であり、既に著者が前記の大著を出版せる折、共に發表すべき豫定の材料であつたが、一九二〇年、日本駐在の命を受けしが爲に公人としての責任上、此の部分の切り離して前者を發表し、以後十年間の努力によつて成果を収めたるものが此の「日本佛教」である。只最後の一章「日蓮宗」はサンソン氏の助けを借らねばならなかつた。内容は是を三部に分ち、第一は印度及び支那に於ける佛教を検討し、第二は日本佛教の歴史を發達的に見、第三は天台、眞言、淨土教

(Amidism)、禪、日蓮の五宗の教義を説いてゐる。五百頁に互る綿密な研究であり、歴史を主眼として居られる。日本佛教の研究としてしかも外人の手になれるものとして此れ程包括的であり、明快であり、インストラクテブである著作は先づあるまい。筆者は大いに此れを推稱したい。

全體に互つて紹介は到底なし得ざる所であり、又卒爾として筆を下して著者の尊き勞作を粗雑に評し去る非禮を敢へてせざるやう謹みつゝ、こゝでは第三部の十六、十七の二章、淨土教と禪とに就いて感じた所を一二記すことに止める。全篇に互つて著者の立場は堅く原始佛教に置かれてゐるが故にその斷定は極めて確然たるものがある。例へば淨土の起原論の如きは云ふまでもなき事、又一切衆生悉有佛性の思想、禪の傳來の否定の如きそれである。引いては釋尊を少くとも眞宗に於いて禮拜の對象とせざる事に迄及んでゐる。更に眞宗が等しく「佛教」の名の下にあることの疑惑に來つてゐる。此は勿論、佛教の原型的傳統の上から來つてゐるのであるが、他面にあつて基督教の傳移的相狀に負ふものがあるらしい。(三頁參照)「法然上人門下の分裂に關しては、師の教説が漠然としてゐたによる」と見てゐるが、隨類異解とみるのが穩當ではなからうか。著者は常に經驗の微妙な箇處に來るたびに立止る。それは前述の如く歴史家の態度を持するからであらう。我々はこの點を著者に逼らうとほしない。「不可傳通性は神祕主義の基調である」とのセームスの言葉を著者自ら引用してゐる。禪は是を意識してゐる、が

淨土は可通性を基礎としてゐる。不自由な言葉に依るとしても師の側に於けて充全性が考へられぬであらうか。

「淨土眞宗」の宗名の立言に就きては、祖聖親鸞が中央を去りて地方に在りしが爲に何の顧慮する所もなく明白に打出せたが中央に残留せる弟子達は他宗への氣兼ねによつて之をなし得なかつたと云ふのは推論であるとしても一寸興味を覺ゆる。只一つ基督教は「神は愛」なるも眞宗は「愛は神」なりと見た點は絶讃したい。基督教に養育せられてこそ此の發言はあり得るもの、二教の教義とその心理的基礎の深き比較が、著者は明白に意識してゐぬかも知られぬが、こゝに打ち出されてゐる。記述は到つて忠實である。

禪の部は尤も穩かである。著者自ら告白せる如く「解つた風はせぬ」やうに説明を進めてゐるが、プラット氏のそれに比して餘程異なつてゐる。尤も「禪は嫌ひ」であると云つてはゐるが。日本は、基督教が英國に入つた西暦五九七年に先立つ四十餘年前に既に佛教を國內に迎へてゐる。その發達の歴史は長い。然し日本佛教は海外に知らるゝこと甚だ少しと聞く。幸に今此の種の名著を得たることを深く喜ぶたい。(K)

Francis Youngusband Modern Mystics, 1935.

近年神秘主義に對する異常な興味が呼び起されて此の種の出

版が續々なされる中で、此の書に筆者の注意の向つたわけは、その「近代的」にあり、又著者が登山家である事であつた。山氣と自然神秘主義の關係が讀めぬか知らんと思つたが、此の點は期待するを得なかつた。然しながら宗教經驗に關心を持つ者の見逃し得ない著作なる事は明かである。内容は古典的な聖者及び神秘學を避けて新しい材料を、ヒンズーのケシヤブ・ラマクリシュナ・ビベカナンダ・回教のバツプとその弟子達・カトリック教ではリジューのテレーズ、プロテスタントでは匿名の作、「黄金泉」及び集團神秘主義に求めてゐる。ラマクリシュナが自然の美に面して恍惚境に入つた説明がゴールの近著ほど冴えてゐぬのと、最後の型の神秘主義の健全性が尙考慮の餘地を残してゐる。こゝで注意したいのはテレーズに就いてである。彼女は(一八七三—一八九七)その最も宗教的な家庭に育つて十五歳にして尼院に入り、二十五歳で天國に召されてゐる。其の短かい生涯は、然し、彼女を死後二十五年にしてカノナイズさせたり程に清純、敬虔の生活であつた。彼女の「魂の歴史」(全六〇〇頁)はそれを備に語つてゐる。その中で特に目につくのは彼女に「園林遊化」の思想(二九五頁)が胚胎してゐることである。これは基督教としては珍らしい筈である。此の可憐な聖者を人々にしたのは此の點であると我々は見ていい。(K)

C. F. Andrews

Sadhu Sunder Single, 1934.

印度教より如何にも劇的に基督教に回心したと云ふので有名になつた近代の神祕家シングの一人が彼に就いて談つてゐる筆録である。シングに就いては自著も八冊あり、彼に關する著作としてはストリーター・アバサミー共著を初め、ハイラー・パーカー等があり、特に最初のそれは彼の宗教經驗の研究として好著である。シングに就いてはその最後が不明になつてゐるので、多分、西藏に入つて生きて居るだらうと云ふ説もあつたが著者は二章二十九頁を費して遂に一九二九年の恐らく五月か六月に「天國へ入つた」だらうと答へてゐる。その間にシングの人となり美しく畫かれてゐる。(K)

支那法制史論叢

桑原 隲藏著

本書は故桑原博士晩年の研究にかゝる支那法制史に關する諸論文を收むるものにして、且て筆者が紹介せし既刊の「東西交通史論」「東洋文明史論叢」と共に博士の學的功績を物語るものであり、且同じく博士門下の諸學者の編纂に成る。收むるといふ左の諸編である。

一、支那の孝道殊に法律上より觀たる支那の孝道（昭和二年十月十五日稿）凡そ孝道は支那の國本であり、國粹である。孝道は支那人の生活全般の基調である。これを全々無視しては支那の過去及び現在に於ける政治、宗教、社會、文化の眞相は理解されぬものである。然らば孝道は何故にかく重要な地位を占むるに至つたか。それは要するに支那に於て發達せし家族制度を維持する必要に本づくものであらう。家族制度の發達せる社會に於ては普通、父母への孝養と祖先崇拜が必要でもあり盛でもある。しかも行孝と祭祖とはその精神全く一つである。支那の古記録は祖先を祭る禮の大切にして、嚴格且複雑なることを物語つて居り、祖先崇拜の盛なることは充分窺知される。而して父母は現實の祖先である。祖先を爾く崇拜する支那人が父母への孝養を輕視する筈はない。而して孝を基調とする儒教の勢力と、孝治主義による支那歴代王朝の方針は益々この風を助長せしものである。孝經は古くより重要な經典の一つとなつてゐる。従つて法律に於ても特に孝を重視してゐる。一體支那の法律は德治主義のもので法治主義のそれではない。即ち法律は道德の延長を意味してゐた。禮と刑とは同一目的を有するものであり、禮は未發を防ぎ刑は既發を懲ずものである。禮は本にして刑は末であり、しかも支那の禮儀道德は家族を主とし孝を第一にするものであるから法律が孝に重きを置きしは當然である。支那歴代の法律は何れも家族又は親屬同志の間に起りし犯罪に就て特に充分の用意をしてゐる。尤も完備した且後世に大

なる影響を與へし唐律に於ては一般の犯罪は相當の罰金を以て償ひ得るものとしたやうであるが、家族内部又は國家に關する十惡をあげて此を犯すものは其の限りでないとしてゐる等、孝道を中心として發展活動せし支那の世相を窺ひ得る。又、支那にあつては佛教と儒教との論争度々行はれたものであるが、儒教の佛教に對する攻撃の重要な點は佛教が家族制度に反し、支那本來の孝道と合致しないものであると云ふことであつた。かくの如くして、あらゆる方面より過去の支那社會に於ける孝道の重要性を論證されしものである。二、「唐明律の比較」唐律は現存せる支那法典の最古のものであり、支那後代の諸法典に大なる影響を與へ、且東亞諸國古代法典の模範になつた點に於て最も尊重すべきものである。明律は支那第二の法典にして唐律より離れて自身の特色を發揮して居る點に於て重視すべく、支那法制史上、唐より元までを唐律の時代とすれば、明・清を明律の時代とすべきであらう。著者は此の唐明兩律を詳細に比較して、唐律には存するが、明代には不必要となりしもの又は有害と認められて條文の削除されしもの相當に存すること、唐律には存せず、明律に特に増加されしもの、唐律には見ゆるも、社會狀態の變遷によつて、改廢せしもの、あること、唐律は正親と義親とに對する犯罪の間に輕重の差を設くるも、明律では同一視せしこと、明律は官吏職制上の規定極めて嚴格なること、等によつて的確なる證を擧げて論じてある、三「支那の古代法律」は昭和四年八月、京大夏季講演會講演筆記にして、博士は本講々々

新刊紹介

の直後、病疾の爲臥床せられしもので、博士最後の面目を偲び得るものである。支那の古代法律が家族主義的見地によれるものなることを該博なる知識と明快なる論旨を以て講ぜし百有五十頁に互る長編なり。四、「王朝の律令と唐の律令」(大正六年十一月歷史と地理六)は、我が大寶律は大體に於て唐律を母法としてゐるけれども、其間に我が國情を斟酌して相當の苦心を拂ひしことを認め得ると主張されしものである。卷頭に博士の小照、狩野博士の序文を附す(昭和十年十月十五日弘文堂發行、菊版三七五頁、價三圓)(野上)

東洋史研究

史學全般に互る學術雜誌は東西の諸大學に依つて數多く刊行されてゐるが、東洋史のみに關する純學術雜誌の刊行は見なかつた。然るに今回京都帝大東洋史料出身の新進學者によつて、「東洋史研究」の發刊されしことは、かゝる學界の虛を衝くものにして斯學に志すもの、等しく慶賀するところであらう。創刊號内容次の如し。圖版烏丹城附近の二大元碑、晉・趙の北方進展と山川の祭祀(森鹿三)、漢代大私有地に於ける小作者と奴隸の問題(宇都宮清吉)、最近五十年支那學界の回顧(アンリ・マス・ペロ(内藤戊申譯))、聖成吉思汗の家譜(山本守譯)、次で批評、紹介、學界展望、近刊叢刊、彙報があり、附録として史姓韻編總目筆畫索引が收めらる。本誌の面目は學界に呈せらる、新刊書

乃至論文に對する鋭き批評紹介にあり、此の點他の學術雜誌に異る方向を示すものであり、そは詳細なる學界展望近刊叢刊と共に、日一日と進み行く東洋史學界の動向を物語る指針であり筆者は本誌の益々發展せんことを切に念ずる一人である。(昭和十年十月創刊號發行、隔月刊、價年參圓)(野上)

諸神本懷集義及研究

西光 義 遵著

緒言に「今年安居講習會副講として、諸神本懷集を講すべきやう、尊命を被むり、淺學を顧みず、參考の爲に本書を著したのであるが唯だ備忘に過ぎないものである」と著書自らが舒べてゐることによつて、本書著述の目的を窺知し得る。

本書の内容は全篇十講より組織づけられ、(第一講)は「本書の撰者と撰述の年代」と題して、諸神本懷集の撰者を淨典目錄に本典籍が擧げられてゐることより存覺が流布本を添削して丁源に書き與へたものであらうと決定し、次いで存師の略傳を誌してゐる。(第二講)は「本書撰述の動機」に就いて、「宗祖已來の相承に依る點と當時の思想に關して考究する點とがあると思ふ」といつて、かゝる二方面よりこれを論述し、更に(第三講)に於いて「本書の題意と大意」を舒べてゐる。

(第四講)より(第八講)迄は正しく本文の講説であつて、「本文序説の解説」「權社の靈神」「諸神の本懷」「勸説」等の講目の下に

各章に「本文」解説「文意」の項目を分ち、これを講述する外、所々に「注意」項目を設けて、更に特別に留意すべき問題を提起してゐる。

(第九講)は「淨土眞宗の神佛論」と題して、宗祖、覺師、蓮師明如上人等の眞宗に於ける神佛論の相承を論じ、(第十講)には存覺上人時代の神佛論の諸説を展望するとともに、上人已後近代に至る神佛論の思想的展開を述べて、最後に現代の眞宗教徒の神祇に對する立場を闡明してこれを結んでゐる。近來眞宗教團内に於いて、外部の或種の刺激からでもあらうけど、神祇問題に關して、様々に檢討せられるやうになつたが、眞宗學徒として、神祇に對する正しき認識と批判を有すると云ふ事は之を等閑に附すべきでない。即ち該研究に於いて一參考書として資せらるべきであらう、因みに本書の冠頭には常樂寺藏の存師の畫像と禿氏祐祥氏所藏の城州八幡山案内繪圖が附載せられてゐる。(文化時報出版部發行、定價貳圓)(野上觀二)

西山全書別卷第一

今回、西山全書の再版に際し、新に其の別卷第一として一昨年の秋、叡山西教寺の正教藏中より發見せられし次の如き、二部の典籍が上梓せられたることば、學界の爲め洵に喜びに堪へない。西山全書正篇は從來流傳したる西山系の典籍を輯載せるものであるから新に紹介の必要を認めないが、本書は新發見未傳の書を刊行せるものなれば茲に紹介の筆を執り度いと思ふの

である。

(1) 假名書「觀念法門觀門義」全二卷 證空撰
原本

本書は、叡山西教寺正教藏所藏の「觀念法門」と表題せる上下二卷の轉寫であるが、その内容は西山全書第四卷所輯の證空の撰述せる「觀念要義釋觀門義」三卷に該當するものである。然るに從來、傳へられし該觀門義は寛文年間に西山の末裔空覺が、證空の假名書自筆本を二尊院の書庫に於いて寫傳し、後にこれを漢文體に改作して門弟に授けられたものであつて、これによつて證空そのもの、文體に接しないことは甚だ遺憾とせられてゐた。されど、今回、新に發見せられたる本書はその奥書に

右者嵯峨二尊院本ヲ以テ書寫之

明曆三丁 年五月吉祥日

江州栗太郡芦浦觀音寺 舜興藏

と誌されてゐるから、これによつて見るに、空覺の轉寫改作に先立つこと數年前、天台學僧舜興が二尊院藏本をそのまゝ傳寫襲藏せしものなることを推知し得る。従て、本書は證空の假名書の文體をそのまゝ傳へてゐるから彼の假名書原本の原形に近きものを復現することを得、以て從來疑問に附せられし空覺譯文の正否を決定するとともに、證空の言葉遣の上にあらはる、彼の思想表現に於ける個性的色彩を味識し得る譯で、貴重な文獻といつてよい。この意味に於いて本書は從來、流傳せる空覺改作のそれに比して遙に研究的價值を有し、西山教義研究者の期待を呼ぶものであらう。尙、本書には森英純氏の解題が附載せられその項目は、(一)「題號に就いて」(二)「思想一斑」(三)

「本書の言葉並に史的價值」(四)「本書の假名遣に就いて」(五)「調卷に就いて」、の如くである。

(2) 觀經四帖疏弘深抄 全九卷 實導撰

本書も前書と同じく西教寺正教藏より發見せられたるものの傳寫であつて、その著者は西山六流中の隨一、本山義の大成者たる實導である。本書こそ正しく未傳稀觀の祕書と稱せらるべきものであつて、從來、西山教義研究者の全く接し得ざるところであつた。元來、實導は本山義の提唱者、示導に師事して彼の教義を傳承し且つそれを大成したる人であつて、その淨土教に關する著述として「論義抄」八卷「希聞鈔」五卷等と今回發見せられたる本書とがある。然るに「論義抄」はその所說難解であり、且つ又「希聞鈔」は簡にして其の意盡さざるところがありとせられてゐたが、本書はそれに異り、善導四帖疏の廣汎なる達意的解説であるから、そこに、彼の淨土教思想の全貌が表現せられ、これによつて吾々は本山義教義の眞髓を窺知し得るわけである。従て本書は、西山流本山義を研究せんとする者にとつては、從來流傳せる示導の「四帖疏康永抄」や彼の「論義抄」「希聞鈔」等とともに必須缺く可らざる貴重な資料として重んぜらるべきであらう。

本書の内容は四帖疏の全般に亘る講釋であつて、「玄義分弘深抄」本末「序分義弘深抄」本末「定善義弘深抄」本中末「散善義弘深抄」本末の九卷より成り、その叙述形式は「觀字事」「先勸大衆等九字事」等と項目を擧げて、達意的に隨文講述せられ、その文體は和漢混淆である。

本書の撰述年代は卷頭の記述によつて、實導が六十六歳以後七十五歳に至る十年間即ち永和元年(皇紀二〇三五)より至徳元年(皇紀二〇四四)に至る間と斷定し得るのであつて、これによつて吾々は本書が如何に彼の畢生の力作であつたかを推量するに足るであらう。而して、本書各卷の奥書によれば前の觀門義と同じく、江州栗太郎普満觀音寺の舜興が嵯峨二尊院より恩借して、慶安二年(皇紀二三〇九)より承應三年(皇紀二三一四)に至る六年間に書寫したものであることを知り得る。

又本書にも廣瀬觀友氏の(一)「實導上人の事蹟」(二)「撰述年代」(三)「本抄の特色」等の項目に分かれたれし解題が附載されてゐる。

以上二部の典籍に就いて兩氏の解題を参照して少しく紹介したまでであるが、それらの思想内容に關する批判等は筆者のよくするところでないからこれを控へ度い。免もあれ、本全書は西山教義の研究にとつて、西山全書正篇と俱に、是非とも一部座右に備ふべき好書であらう。

(昭和二〇、一〇、文榮堂發行、菊版四六二頁定價五圓)

(野上 觀一)

研究室彙報

佛敎學研究室

佛敎史學會

一、秋季見學旅行

吉野高野山方面

十一月一日午前八時京都驛出發

同二日午後九時新京阪四條大宮にて解散

指導 大屋徳城敎授

參加者 學生十二名

一、十一月十三日(水曜日)午後三時より、會議室に於て

例會開催。

講師及講題

眞宗高田派に於ける秘密相傳に就いて

日下無倫敎授

朝鮮京城所見の佛典に就いて

大屋徳城敎授

出席者 研究科佐々木正縁君以下學生十八名。